

米欧亜回覧

第38号

発行

特定非営利活動法人

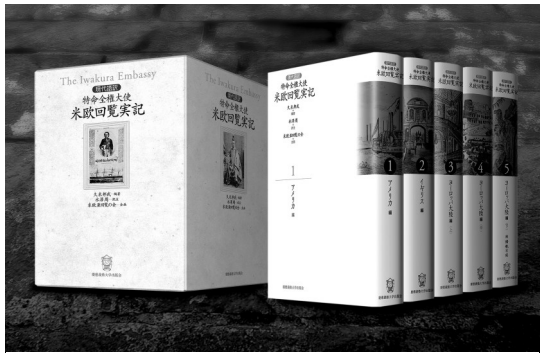
米欧亜回覧の会

編集 総務部会

「現代語訳・米欧回覧実記」全五巻

四月下旬、いよいよ刊行!

「米欧亜回覧の会」企画、水沢周氏訳による、「現代語訳・米欧回覧実記」全五巻が、慶應義塾大学出版会からいよいよ出版の運びとなり、四月二十三日の例会でその初版本が披露されることになった。これはもとより水沢周氏の大労作によるものであるが、当会の八十数回にわたる「実記を読む会」の実績が生かされ出版に到った



「現代語訳・米欧回覧実記」

ことも思い合わせまことにご同慶に堪えない。

内容は原本に即した形の五巻本となり、註は八百項目にも及んでいる。そこに水沢周氏の綿密周到な考証が見られる。価格は全五巻セット(分売不可)で二万五千元、当会の会員に限り二割引で購入できる。具体的な申し込み方法などは、別紙案内を参照されたい。

第三十七回 全体例会

四月二十三日(土)に開催

杉谷先生の講演並びに

出版祝賀会も併催!

当会設立十年目にはいる三十七回例会は、NPO法人化後初の総会になる。年次報告、決算報告、次年度活動計画などが行われる。

また、「現代語訳・米欧回覧実記」の出版に併せて、「久米邦武」に詳しい獨協大学名誉教授の杉谷昭教授を招聘しご講

演をお願いすることになった。なお、その後、別会場で内輪の出版記念祝賀会を催す。水沢周氏の永年のご苦勞をねぎらい大いなる祝意を表するとともに、本会企画の書として刊行されることに祝杯を挙げたい。

青年部「スタート」!

かねてからの願望だった青年部(仮称)が立ち上げられ、その第一回会合が四月一日に開かれる。これは、山本陽子さんと岡松暁子さんの二人が中心になり、若い世代に呼びかけて発足するもので、二月に準備会が行われ、四月からは毎月定例で開催されることになった。現時点の参加予定メンバーは十五名、いずれも二十代、三十代の青年で、今後の発展が大いに期待される。(詳細は四頁)

新年会盛況!

新年会は一月十二日(水)、赤坂にあるシテイ・クラブ・オブ・トウキョウで、オーストリアをテーマに開催された。会は特別編成のトリオによるウイーン音楽の流れる中、モーザーオーストリア駐日大使、橋本駐ウイーン前日本大使、久米邦貞日本オーストリア協会会長ご夫妻らの臨席を得て賑々しく行われた。

そして百二十名に達する参会者は、華麗に、なごやかに懇親を深め、盛会のうちに終了した。(詳細は二・三頁)

本会設立十年目の四月を迎えるに際し、待望の三つのことが現実になることはまことに喜ばしい。一つはNPO法人化であり、一つは「現代語訳」の出版であり、一つは青年部の発足である。それはいづれも本会の新しい展開と飛躍へのステップを予感させる。むろん、そのいずれもが会員の今後の協力にまつところ大であるが、それは会の方向を示す三つの光だといつていい。

設立十年、「三つの光」に期待する

泉 三郎

はなかなか普及がむずかしい。たとえば海外との関係が深い会社、官庁、旅行業界、日本語学校、あるいは高校、中学の図書室など、若い世代の目に触れる場所である。会員の中でも各種関係先には積極的なPRに務めてもらい、資金的に余裕がある方には購入して母校や地元図書館などに寄贈してもらえと有り難い。

NPO化はすでに形式的には半年前に実現しているが、これからが実体充実の本番であり総務部を中心にいろいろの活動が動き始めている。具体的には、活動内容の充実、組織の強化、財政基盤の整備、事務局の充実などだが、それぞれに徐々にながら取り組みが進んでおり今後が期待される。

また、「現代語訳」の出版については、これから半年、一年と年月を経るにしたがい大きな反響をもたらす可能性がある。ただ、価格的なハードルがあるため、一般に誘っても余りに年齢差があるため敷居が高く入会や継続に無理があつたが、これからは青年同志、気易く語り合える仲間がいるということ、入会が容易になる。現代語訳の出版と併せ、インターネットのさらなる活用も含め、今後の展開が大いに期待される。

第35回 全体例会

オーストリアをテーマに 新年例会、盛会！



ウィーン万博
(『実記』)

平成十七年の新年例会は一月十二日(水)十八時より、赤坂のカナダ大使館に隣接したCITY CLUB OF TOKYOで開催された。新年例会は、毎年、使節団が歴訪した十二カ国のうちから一国を選び、その国をテーマに実施してきた。この試みを始めてより、これまで六カ国(米、英、仏、独、伊、スイス)をテーマ国としてきたが、

今年は、使節団がオーストリアを訪問した一八七三年六月、ウィーンで万国博が開催されていたこともあり、一方日本でも

今年、愛知で万国博(愛、地球博)が開催されることに因み、オーストリアをテーマ国として選ぶこととした。

今回は在日オーストリア大使のペーター・モーザー氏、同大使館、商務参事官のラーシャ・エルンスト氏、前駐オーストリア大使・橋本宏氏、日澳協会会長(元駐ドイツ大使)久米邦貞氏をはじめ多数の来賓、招待客のご参加をいただき当日は百二十名を上回る参会者を得て大盛会となった。

会は冒頭、昨年末のインドネシア沖津波の犠牲となられた方々の冥福を祈って黙祷を行った。次いで恒例になっている『実記』の朗読(今年はウィーンおよび万国博の記述から抜粋、朗読者は岡松暁子さん)を行い、続いて泉代表から『実記』のオーストリア記述部分に触れ、使節団が見聞したものに敷衍しながらの新年挨拶があった。

来賓からは、モーザー大使、久米会長のご挨拶があり、橋本大使のご発声による乾杯と進んだ(この間は来賓の紹介を兼ねて藤原宣夫氏の司会で進行)。



乾杯！(ご発声は橋本大使)



恒例の『実記』朗読
(岡松暁子さん)

約三分の歓談の後、第二部では佐藤裕子さんのスピーチとピアノ演奏が披露された。佐藤さんはウィーン国立音大ピアノ科首席卒業、現在世界各地で演奏活動中の方で、当日はシューベルトの「即興曲」、クライスラーの「愛の喜び」の二曲を奏でた。そして、市川早大教授、井上一橋大教授のスピーチがあり、最後に、この会が例会を兼ねていることもあり、水沢周氏から出版間近となった現代語訳の進行状況報告と執筆の感想、山本陽子さんから青年部会立ち上げの現状報告、山田哲司氏から九月頃の予定で



水沢氏の現代語訳進行状況報告

■新年例会のスナップ■



コア・セシリア・トリオの
ウィーン音楽



モーザー大使と歓談



新年挨拶する泉代表



来賓を紹介する藤原氏



全体司会の山田氏
画計を行旅アリト



佐藤裕子さんの
ピアノ演奏

中であること、また、四月の長州歴史ツアー、四月例会などの行事予定についてなどの会務報告を行って、二十時三十分閉会した。

全体司会は山田哲司氏。料理、酒(乾杯にオーストリアメッテルニヒゆかりのピンクシャンペン、そのほかは、ワインなどのキャッシュバー方式サービス)音楽(後藤かをるさんとコアー・セシリア・トリオの皆さん、ピアノ、チェロ、バイオリンによるウイーン音楽のメドレー)、室内のポスターほかによる飾りつけ、などウイーン風の雰囲気があるのに演出されていて、会員以外の参会者との交流も盛んに行なわれ、和やかに楽しい会となった。

主なスピーチの内容は以下のとおり。

■モーザー大使の挨拶要旨

自分は米国大使を務めた後、自ら望んで自分のキャリアアの最後に日本大使を務めることになり大変うれしく思っています。日本ではオーストリアといえば音楽とスキートの国と



モーザー大使

思われることでしよう。多くの日本人が音楽を学びにウイーンに来ておられますが、最近では、小沢征爾さんのように現地で活躍しておられる方もいて、音楽の交流はますます深まっています。

日奥両国はともに古い文化を持ち、百三十年代の岩倉使節団のオーストリア訪問をはじめ、交流の歴史は古く、使節団のことはパンツァー教授の独訳もあり承知しています。当時は日本がオーストリアで多くのものを学んで帰られたことと思いますが、現在では反対に、オーストリアが日本から多くのものを学んでいると喜んでよいでしょう。

■久米会長の挨拶要旨

オーストリアといえば、大使も述べられたとおり、音楽、スキーそしてアルプスの山々であり、私もこれらが好きであります。しかし、私が今、深く感銘を受けているのは、この国が、グローバル化が進む世界の中で、国も地方も、ローカルなアイデンティティを頑なに守り、伝統を維持しつつ、EUへの



久米邦貞氏

の対応を見事に果たしていることであります。高い国民所得、低い失業率など経済のパフォーマンスも良好であります。EUの原型ともいえるハプスブルグ家以来、多民族融合の政治・文化の歴史を有する国なるが故とも申せましょう。岩倉使節団がもたらした明治のグローバリゼーションを思うにつけ、現在、グローバリゼーションの動きの中で、日本が座標軸を見失っているのではないかと、不安に思っているところです。この意味で、オーストリアに学ばねばならないことが多いと考えている次第です。

岩倉使節団出発後の一八七一年七月、ヒュブナーというオーストリア外交官がアメリカ経由で横浜に到着した。彼はパリやバチカンなどの大使を歴任した練達の外交官でヨーロッパでは知られた存在だった。引退後世界一周の旅に出、途中日本に立ち寄り、明治新政府の要人たちはもとより、反政府側の人物たちとも会って、「オーストリア外交官の明治維新」という本を書いた。この本は当初、当時の外交語であったフランス語で書かれたので、私はフランス語から翻訳した。興味深い内容で、当会の方々に是非目を通していただきたいと思うが、現在は絶版となっているので、図書館などでお読

■橋本前オーストリア大使の乾杯・挨拶

昨年八月末までオーストリア大使を務めていました。たまたま昨日、天皇皇后両陛下にお目にかかり、勤務の状況についてご報告する機会がありました。が、両陛下は、私の前任者のときにオーストリアをご訪問されていたので、大変懐かしく思われたようでありました。また昨年亡くなったフレックツェル大統領のことなどもお



橋本宏氏



市川慎一氏

話申し上げました。ここにおられる、モーザー大使と私の後任の梅津大使をはじめ、ご列席の皆さんほか多くの方々のご支援により日奥関係がますます発展いたしますよう祈念して乾杯をいたしたいと思います。

■市川慎一 早大教授のスピーチ

私は昨年三月までウイーン大学で日本近代文学を講義していたので、そのときの思い出話をさせていただきたい。第一にインフラが素晴らしい。特に地下鉄が便利で安価で使い勝手がよかつた。第二に子供たちが可愛らしく天真爛漫で生き生きしている。これは競争のない社会で育ち、高校を卒業すれば、好きな国立大学に進学できるような環境がもたらしたものだ。第三に音楽が素晴らしい。国立歌劇場のチケットでも五、六千円程度で手に入る。さらに美しい女性が多くみな体格がよい。そして夜中に女性が一人歩きをしても安全なほど治安がよい。オーストリアは観光でいくのではなく、一年ぐらい住むと本当のよさがわかる国だ。



井上義夫氏

■井上義夫 一橋大教授のスピーチ

私は昨年三月までウイーン大学で日本近代文学を講義していたので、そのときの思い出話をさせていただきたい。第一にインフラが素晴らしい。特に地下鉄が便利で安価で使い勝手がよかつた。第二に子供たちが可愛らしく天真爛漫で生き生きしている。これは競争のない社会で育ち、高校を卒業すれば、好きな国立大学に進学できるような環境がもたらしたものだ。第三に音楽が素晴らしい。国立歌劇場のチケットでも五、六千円程度で手に入る。さらに美しい女性が多くみな体格がよい。そして夜中に女性が一人歩きをしても安全なほど治安がよい。オーストリアは観光でいくのではなく、一年ぐらい住むと本当のよさがわかる国だ。

(文責) 山田哲司
(写真) 橋本吉信

「若い世代」をキーワードに 大きな期待を浴びて青年部会発足!

NPO法人化に伴う当面の課題の一つに「若い年齢層の会員増」(NEWS三十六号四頁参照)がある。このたび、呼びかけに応じた山本陽子さんと岡松暁子さんの二人が世話役となつて「米欧亜回覧の会青年部会」(仮称)が発足することとなり、二月十八日(金)に発足会が開かれ、二十代、三十代の新規会員を含む約十五名の新しい部会が誕生した。

そして、四月一日には、泉代表を講師に「岩倉使節団の人选」を演題にした第一回の小セミナーが開催され、多数が参加した。



青年部会・第1回小セミナー(4月1日)

この部会は、「明治」という時代やその時代の人物から学びたいと思っている「若い世代」が、「明治」と「幕末」をキーワードとして、会員の皆様にご協力いただきながら勉強する機会を得ることを目的としています。

趣意

当面は、さまざまな角度から今の時代に通じる議論を展開できるような小セミナーと、「『米欧回覧実記』の現代語訳を読む会」を開催する予定です。

<青年部会日程、その他>

1. 原則、毎月前半の金曜日
2. 時間：午後8時～10時
3. 場所：備屋珈琲店・貴賓室
渋谷区恵比寿4-4-11
J R恵比寿東口すぐ
電話 03-5488-1651
4. 会費：1000円(食事は実費)
5. 幹事(世話人)
山本陽子、岡崎暁子
6. 連絡先は8頁参照

- ・ 参加者から関心のあるテーマを募り、講師(会員)を依頼する。
- ・ 一時間程度の講演の後、自由に討論。
- ・ 現在出ているテーマ
- ・ 教育(寺子屋教育と現代の教育)
- ・ 外交交渉(当時の不平等条約締結及び改正の経緯と現在の日本の外交交渉の検討)
- ・ 明治の人材育成、岩倉使節団の人選について
- ・ 当面、隔月で開催。

二、「米欧回覧実記」の現代語訳を読む会について

- (一) 時系列で読み進める。
- (二) 『米欧回覧実記』の該当部分の一部を朗読し、「日本語」を考える。
- (三) すでに内容を熟知していらっしゃる方にご参加いただき、ご指導をいただく。
- (四) ディスカッションの中から小セミナーのテーマを考えることも期待。
- (五) 当面、隔月で開催。

ビデオ映写会報告

鴨川義塾で米国編上映

岩崎洋三

三月十三日(日)に千葉県鴨川市の鴨川義塾で米国編の上映と講演をおこなった。聴衆は鴨川義塾の塾生を中心に約十五名で、白熱した議論になった。というのも、この塾は元慶応大学商学部で福沢研究センターの初代所長であった石坂巖先生を塾長に抱き、教え子の元ゼミ生と地域の方々を中心に、石坂先生の「学問のすすめ」の連続講義を聞いている会だからである。

ビデオ上映を経験して

石川直義

昨年十二月に講師速成ビデオ研修会の直後、学生の横断ネットワーク経営研究会「マリタイムジャパン21」から伊藤博文の講演を頼まれ、喜んで引き受けた。ビデオ三巻の内第一巻の米国編をイントロダクションに使って伊藤博文の国益を守った一生を話した。

経験から学んだことは、第一に、一時間半かかる三巻上映は通常不可能である。第二に、聴衆は岩倉使節団の記録そのものよりも明治維新当時の人間の生き方、明治国家建設への貢献や日本にとつての今日的意義の話を求めている。第三に、NPO法人として収入を期待したがそれは当分難しいと考えざるを得ず、上映の機会を得たことに感謝し、当会の広報活動と割り切った方が良いでしょう。

私は四月十九日に都立青山高校の同窓会、五月二十七日にワールド・フォーラム、六月一日に一橋剣友会からビデオ上映と講演の要請を戴いている。

「学問のすすめ」について石坂先生が第十三編を講じた後、小生がゲストとしてビデオ上映と「岩倉使節団の見たアメリカ」を講演した。さて、大型液晶プロジェクトで上映したビデオは殊の外鮮明で、選び抜かれた資料写真の素晴らしさと要を得たナレーションとも大好評だった。岩倉と同時代の福沢のことを勉強している方々にとつて、岩倉使節団のとてもない視察旅行の実態を、映像で短時間に把握出来ることは収穫だった様だ。機会をいただいた椎野瑞穂様に感謝する。



現代語訳 米欧回覧実記の 資料館づくりに参加しませんか

水沢周

「現代語訳・米欧回覧実記」全五巻がよいよ刊行された。訳者としては引き続きその索引作りをぜひ進めたいと考えている。

『実記』は、近代に目覚めたばかりの日本の知識人が、先行する欧米の近代社会をつぶさに見た記録の集大成であり、産業革命最高揚期文明のエンサイクロペディアの観がある。ということ、記述が極めて多岐にわたり、錯綜している部分もある(このことは久米邦武自身も認めている)ということである。従って全記述に関する分類索引があれば、この本の利用価値は飛躍的に高まり、理解も行き届く筈である。しかし、記述と索引作りを同時進行することとは無理だから、ともかくも本文を刊行した後に、索引にとりかかるかと考えていた。

百科事典や年表類を見ても、索引を欠くのは、いわば「玉の杯の底がない」ようなものであるからだ。

その索引であるが、印刷物にするのもいいが、CD・ROMにすれば、さらに汎用性が増すのではないか。その情報容量がきわめて大きいという利点を

考え、他のデータも豊富に入れられる。現代語訳『実記』の刊行者、慶応義塾大学出版会は、十二巻の『福沢諭吉選集』を既に出版しており、その付録として『福沢諭吉資料館』というCD・ROMを作成・配布している。それは総索引のほか、諭吉の生涯年表、著作解題、語録、関連人物解説、諭吉の旅等の、なかなか魅力的なアイテムを収録している。

このひそみにならない、我々も『米欧回覧実記』と久米邦武資料館』を作つてはどうか。とりあえず考えられるのは、テーマ別総索引を中心とした諸索引、使節団の人々の経歴紹介、訪問先の人物紹介、『実記』の旅についての案内、『実記』成立過程の紹介、使節団関係資料リスト、『実記』ならびに使節団研究のリストといったところだが、まだまだいろいろ魅力的なアイテムがありそうに思う。しかし、主たる内容はやはり総索引で、これは項目毎に全巻に克明に当たり、落ちのないようにリスト化して行く、全く手抜きを許さない根気仕事である。これは出来れば何人かの協同作業を行いたい。いずれ近い

うちにこの『資料館』のためのチームを立ち上げたいと考えているのだが、ぜひ有志の(と)いうよりは篤志の人の参加を切望する。

岩倉使節団という冒険

第二回合評会報告



第二回の合同書評会(泉氏の原著「岩倉使節団という冒険」の合評会)が三月十日(木)国際文化会館で十四名が出席して行われた。

はじめに、泉氏より用意したレジュメにより、前回合評会での質疑について応答があり、その後フリーディスカッションを行った。応答部分の要旨は以下のとおりである。

一. 出た問題点についての応答

Q: この本は、基本的に明るいな。ショナリズム路線であり、近代化への懐疑、影の部分への言及がみられないのではないか。

A: それについてはご指摘の通りで、戦後の日本史学が「近代化の影」の部分に重点をおいており、むしろ偏向していたと思われ、意識的に明るい部分を強調したともいえる。その意味では司馬遼太郎と同じスタンスにあるといっている。

Q: 条約改正交渉などの視点、言及が欠落している。
A: 条約改正交渉などについては、やはり「新書」という紙幅の限界の中で扱えなかったと解釈していただきたい。

Q: 理事官ほかの報告書や私信など未研究の資料がまだある、歴史的テキストとして読む場合の今後の課題ではないか。

A: 理事官、随員、それに吉田清成、鮫島尚信などの報告書、私信などまだまだ未開拓の資料があり、それらを丹念に読んでいけば、いろいろのことがわかってくる可能性がある。例の会計報告のことも含め、当会でも誰か研究してくれると有り難い。

Q: 明治日本は何故、もつと漸進的な近代化を遂げられなかったか。

A: 黒船の脅威、植民地化される危機意識が近代化を急がせた最大の原因ではないのか。夏目漱石の明治四十四年の有名な講演「日本の文明開化」にあるように、「涙を呑んで上滑りに滑っていかなくてはいいけなかった」のではないか。

Q: 人間関係からのアプローチという色彩、権力闘争の視点が強いように思うが。

A: 人物中心の組立てというものはその通りだと思う。歴史は結局人間がつくっていくもので、論理や理屈だけで動くものではなく、もつと人間くさいものだ

と思う。
Q: 明治六年の政変をどう解釈するか。そして明治四年政変により自由民権派が追放され英国派が退潮しドイツ派が台頭するが、その理由は?

A: 天皇を玉とし「錦の御旗」として来た革命の経緯が根底にあり、その上に天皇復権論者である岩倉の執念が、影響したのではないか。その意味で、錦の御旗の威力を熟知していた革命第一世代とくに薩長派と、当時はまだ脇役ないし外野にいた土佐、佐賀派では、天皇の存在に対する温度差がかなりあったのではないか。それに徳川幕府に対する距離感が薩長と土肥では旧藩主の思惑や立場にもみられるようにかなり違うと思う。

二. それ以外の問題点について

◆「米欧回覧実記」と「岩倉使節団」については時に混同される傾向があるが、それはむしろイコールではないことをはっきり認識すべきだ。とくにその影響については、分けて考えないといけない。

◆「米欧回覧実記」の内容について、一部に単なる旅行記とする見方もあるが、それは浅薄な見方であり、『実記』は同時に西洋文明のエンサイクロペディア的見聞録であり、東西文明比較の洞察の書であると思

長州ツアー

二泊三日で実施!

かねて企画されていた長州歴史ツアーが、四月十三日(水)から十五日(金)の二泊三日の予定で実施される。明治維新の起爆力となりその革命を主導した長州には多くの史跡と大活躍した幾多の人材ゆかりの跡がある。伊藤博文のご子孫も同行されることになり、各地では郷土史家との交流も予定されており、日本の近代史を振り返る絶好の歴史ツアーになるものと期待

される。費用概算は、羽田発着で七万八千円。スケジュールは左記の通り。

四月十三日

羽田・山口空港、専用バスで下関、萩回覧、萩泊。

四月十四日

萩市内回覧、山口市へ、山口市内回覧、伊藤博文公資料館、山口空港・羽田。

四月十五日

現在時点での参加予定者は

二十名。

(左) 伊藤博文公資料館
(下) 萩市



(光市および萩市役所ホームページより)

実記を読む会報告

連絡 クラウンインターチェンジ

Tel 03-5469-2090 Fax 03-5469-2093

info@crown-interchange.com



■例会報告

一〇三月の読む会例会は、暫定司会者小野氏のもとで進められ、一月は第三十一巻の「エジンバラの記」を読む。元王宮もありスコットランドの政治・経済

の中心であるエジンバラでは、使節団は、自然の美とともに、裁判所、大学校、産業博物館、スチーム・エジンジン工場、ゴム工場、製紙場などのほか、各地の灯台も見学している。日本の灯台はスコットランド出身の

ブライトン氏によって、その基礎を作られている。有名な女王メアリー・スチュアートについては、魔女か聖女かの議論があったが、魔女・妖婦とするには可愛そうな、歴史上の貢献が多かった悲劇の女王との結論で結ばれた。

二〇三月は第三十二巻の「ハイルンドー山水の記」の有名な久米邦武の美文調・風景描写をひたすら読んで、その名文を心ゆくまで味わった。ここは、岩倉大使がパークス氏の誘いで一行から離れて、久米ほかわずか七人で静養の為に訪れた山岳の景勝地で、久米のこの部分の描写力は、回覧の記全巻を通じても白眉で、のちの徳富蘆花の「自然と人生」、国木田独歩

の「武蔵野」、島崎藤村の「千曲川のスケッチ」志賀重昂の「日本風景論」などに先立つ写真主義を先取りしている、風景論で盛り上がった。

■四月以降の運営方針

三十三巻(英国編ニューキヤッスル)以降、四十巻までを読むことを原則とする。進め方は自由な論壇形式。読む箇所は、昨年決めた箇所を原則とするが、特にそれ以外で希望があれば申し出てください。

毎回、冒頭に前回指名された一〇二名が、五分間、自分の気に入った部分を選び朗読する。毎回、一時間前後は特別講義・報告に当てる。報告希望者は申し出下さい。特に、第八十

九巻〜第九十三巻の総論部分の希望者を請う。

(文) 小野博正

■二月例会

二月十七日、参加者七人。十九章、

英訳実記を読む会報告

連絡 岩崎洋三

Tel & Fax 03-3488-0532

zaa96087@oak.zero.ad.jp



二月十七日、参加者七人。十九章、最後の部分で、大森氏がキリスト教を論じた部分を、森本氏が Grand Central Terminal を描いた部分を、岩崎氏が新聞・電信や牡蠣の養殖を

記述した部分を、何時もの様に朗読、コメント、注記翻訳、誤訳指摘と順調に進めた。人数が少ないのに何時も以上に喧しかったのは、「ふうてんの戯言」と久米が決めたつけたキリストと久米が面白かったのと、牡蠣の養殖を妙に詳しく論じていたアンバランスさにあった。

■三月例会

三月十八日、参加者十二名。アメリカ篇第二十章(三七九〜三九六頁)を読み進めた。三原氏がボストン市訪問の様子を読み、大歓迎の宴会の席で食後のスピーチをしたアメリカ人の略歴紹介あり、特に日本領事 Brooks の功績などについて

て面白い話があった。続いて橋本氏からローレンス訪問の様子、綿の紡織染工場見学の様子について読み、イギリスの綿業の歴史の紹介があった。永島氏からのローラ・プリンティングの工程、ジャカード織機の説明についての朗読終わったところ(三八九頁下三行目)で時間切れとなった。本日第一巻を読み終える予定であったが、五頁ほど次回に持ち越すことになった。

本日ゲストとして参加いただいた青山学院女子短期大学の英文学科の加納孝代氏から比較文化の講義「岩倉使節団の米・英見聞記を読む」の状況について紹介頂いた。英語の教師資格を取るには必須科目である。

対象は短期大学二年生、一年かけて都市別、項目別に原本、英訳本を読む。前期でアメリカ篇を後期でイギリス篇を済ます。毎回出席者には短文(二〇〜三百字)の読後感想カードを書かせる。提出で出欠も分かるし、理解の進歩が分かる。はじめは馴染めなかった久米の漢語も一年たつと読めるようになるという。英文の間違いいも見つけるし、また日本語、英語、地図、年表を丁寧に見るようになる。将来海外に行くときの楽しみになることも言っている。代表的な学生二名のカードの紹介があった。若い人に興味を持

たせるためにどうすればよいか、別途時間をかけてお話しただけると参考になる。
(英訳実記を読む会のメイリングリストより転載)



ボストン・リビアハウス
(「堂々たる日本人」)

総務部会からのお願い

一・事務局支援のお願い

総務部会では、事務局の仕事在宅のまま、支援していただける方を募集している。具体的には、メールによる連絡事務、資料の整理、記録、ホームページの担当(リニューアル、質問への対応)など。NPO化とともに事務容量も増加しており、事務局の充実、整備を図ることが緊急の課題となっている。会員の皆様の積極的なご協力をお待ちする。内容等のご相談、問い合わせは山田哲司まで。

二・会員拡大のお願い

会員数の増加は会運営の

現未来部会報告

連絡 塚本 弘

Tel 03-3211-2765 Fax 03-3213-1371

hiroshi.tsukamoto@jetro.go.jp



三月十八日(金)国際文化会館に十七名が参加。テーマは「日中関係の未来」。小泉総理の靖国神社参拝を契機に日中関係はこじれ、首脳の間は止まり、経熱政治と評される昨今の日中関係に明るい未来はあるのか。我々はどう対処すべきかを論じた。スピー

基礎であるが、最近では正会員数がやや伸び悩んでいる。また、準会員制度を設けていることもご承知のとおりである。準会員は遠隔地の方、学生および青年層、その他、とり敢えず会の雰囲気を知りたいと思われている方などを対象にした制度で、入会金なし、年会費三千円となっている。正会員拡大とともに、準会員の獲得、拡大もあわせて図りたいと考えている。会員の方々、お一人お一人、周りの方々に呼びかけて、会員増加にご協力をお願いしたい。連絡、問い合わせは事務局まで。

カーに中国問題専門家である津上俊哉氏を招き、約一時間「中国改革開放の行方」というテーマで話を聞き、その後デスクッションを行った。津上氏は通産省出身で、北京駐在経済参事官などを歴任、「中国台頭―日本は何をなすべきか」(日本経済新聞)という著書もあり、最近中国との関係を扱う会社を起業、本日のテーマを論ずるには適切な方であった。骨子は(一)最近の中国の状況、改革開放政策の行方はどうなるのか、(二)日本の進路。東アジア経済統合に進むのか。(三)日中ビジネスの行方はどうなるか。注意すべき点は何か。最後に(四)今後の北東アジアと日本の進路、政治・外交はどう展開するのか。であった。注目のべき点を幾つか列挙すると、貧富の差・地域格差、環境破壊等、改革開放の副作用が顕著化してきた。これは昭和四十年代頃の日本の状況に似ている。ここに来て中国の国家収入・財政収入が激増し、二〇〇〇年から二〇〇四年の間に二・四倍増となり、恵まれない人達への支出を急増させ、「荒ぶる資本主義」から、漸く「ごく初歩的な福祉国家」への対策が打てるようになった。この辺の事情を、日本のマスコミは全然勉強不足で、ちゃんとしたフォローをしていない。これまたかつての日本の高成長の果実を日本海側等

の日の当たらない地域にばら撒いた田中政治に似た状況である。中国は共産党独裁と資本主義が併存する国家というより開発独裁国家というべきである。分裂国家への兆しが見えれば断固たる手を打つだろう。中国経済は痛みを伴う改革から手を緩めれば、必ず何年後またおぞましい結果を招く。しかし湖錦濤・温家宝政権は痛みを伴う改革を断行する決意手を見出せるか。また日中関係に懸かる諸問題は、小泉総理が靖国参拝を止めれば片付くかというほど単純なものではなく、必ず次々難問が出現する。中国の民主化が進めば進むほど反日感情は高まる。今後の日中関係は戦争にならないだけましと思うほどの関係と認識すべき、誠に厄介な状況がしばらくは続く。ではどうすれば良いのか。等々興味ある多くの論点に多くの質疑が寄せられ、我々は意外に中国の実情を知らなさ過ぎるのではないか。中国との知人友人を多く作り、中国からの観光客の誘致、投資をどんどん増やすのも有効ではないか。等々活発な議論で盛りあがったが、もともと一筋縄ではない大きなテーマであるだけに、理解は深まったが、何とも落ち着きの悪い余韻を残し、時間切れで散会となった。

(文) 小田仁彦

関西支部報告

連絡 北村 彰一



shou1@f7.dion.ne.jp

■新年会報告

一月二十日(木)十二時、十五名が参加。山崎氏が年頭の挨拶、元旦にソルトレイクで使節団がどのように過ごしていたか久米が著した「奉使欧米紀行」のコピーを

配って説明。ついで厩居氏より「教育タイムス」に書かれた本について紹介があり、明治の留学生達は良く勉強し、持ち帰った知識を青年たちに伝え、自らも実業などで知識を生かそうとしたことに感銘を受けた。

一時四十分頃よりメインのビデオ上映に移り、二〇〇一年の国際フォーラムでの芳賀徹教授の基調講演「福沢諭吉と久米邦武」を視聴した。

難波氏が福沢諭吉の思考、特質について説明し、研究の便宜のため取寄せた国立公文書館等の利用案内が配られる。日本の公文書をはじめ歴史文献や資料保存の遅れ、その原因の一つである終戦時の書類焼却命令などの問題が話題になる。四時以後は場所を変え有志参加の二次会に移り、盛り上った。

(文) 北村彰一

特定非営利活動法人
「米欧亜回覧の会」ご案内

- 趣旨** この会は「岩倉使節団」に興味をもち、その記録である「米欧回覧実記」に関心を抱く人々の集まりです。この大いなる旅と「実記」はまさに「温故知新」の宝庫と言えましょう。この素材を媒体にして歴史をふりかえり現代の直面する諸問題についても自由に語りあおうという会です。
- 会員** 上の趣旨に賛同する人なら誰でも入会できます。
- 例会** 年に4回くらい全体例会をもちます。
- 部会** テーマ別に読む会、歴史、現未来、総務部会等があり、映像サロン・勉強会・旅行会・研究会・シンポジウムなどを行っています。
- 機関紙** 年に4回程度機関紙を発行し活動報告や会員の意見発表、情報交換の媒体とします。
- 役員** 理事長(泉三郎)他理事および監事で構成、会員の中から幹事十数名を選び、運営を担当します。
- 会費** 年会費5,000円とし、主として通信費及び機関紙代に充当します。例会・部会・講演会などについては、その都度の会費とします。なお、遠隔地居住者、学生、仮入会希望者には準会員(年会費3,000円)の特典もあります。

事務局 「イズミ・オフィス」に置きます。
〒192-0063 八王子市元横山町1-14-16
E-mail:info@iwakura-mission.gr.jp
TEL:0426-46-3310
FAX:0426-45-8700

入会申込

入会申込書は事務局にあります。新規入会に際しては入会金5,000円を頂きます。(準会員は不要です)なお年会費などのお支払は郵便振込が便利です。
00180-2-580729 特定非営利活動法人米欧亜回覧の会



.....ホームページのご案内.....

◇米欧回覧ニュース第1号からのバックナンバー など

* 皆様のご意見をお聞かせ下さい

<http://www.iwakura-mission.jp>

<催し案内>

2005年4月～7月の予定です

☆第36回全体例会

日時：4月23日(土) 13:30～17:00
場所：学術総合センター(一部、二部)
電話 03-4212-6321
内容：一部；総会 13:30～14:45
二部；講演 15:00～17:00
杉谷昭先生(佐賀大学名誉教授)
「和魂漢才から和魂洋才へ
久米邦武の知的背景を探る」
三部；出版記念祝賀会 17:30～
新世界菜館(神保町交差点九段寄り)
電話 03-3261-4957
会費：3000円(一部、二部) 5000円(三部祝賀会)

☆実記を読む会

日時：5月12日(木)
6月9日(木)
7月7日(木)
場所：南青山クラウンインターチェンジ内サロン
電話 03-5469-2090

☆英訳実記を読む会

日時：4月21日(木) 18:30～21:00
場所：財)統計研究会会議室
港区新橋1-18-16 日本生命ビル7階
(JR・銀座線新橋駅から徒歩3分)
電話 03-3591-8496
世話人 岩崎洋三 zaa96087@oak.zero.ad.jp

☆青年部会(仮称)

■第1回『米欧回覧実記』の現代語訳を読む会
日時：5月13日(金) 20:00～22:00
■第2回 小セミナー
日時：6月13日(金) 20:00～22:00
講演者：石川直義氏 「津田梅子と人材育成」
会場：備屋珈琲店 貴賓室WEST(予定)
JR恵比寿東口駅前 電話 03-5488-1651
連絡先：山本陽子 mase@yhb.att.ne.jp

☆関西支部例会

編集後記

◇発行日は、ぎりぎりまで間に合わせるのが常でしたが、今号は予定より大幅に遅れてしまいました、お詫びいたします。パソコンのOSを新しくしたら、様々な不都合が生じ、却って編集に時間がかかってしまいました。発行が遅れた理由にはなりません。
◇第三十六号で、NPO法人化に伴う課題として八項目が挙げられています。その中の一つが「若い年代層の会員増を図るため、具体的な実施策を検討」ですが、四頁に掲載した通り早くも青年部会が発足し、活動を開始しました。若い約十五人の情熱とパワーに大いに刺激を受けたと思います。忙しい世代の合時間帯は、午後八時～十時です。体力に自信のある「非青年」の方の応援参加を期待します。
◇もう一つ、「収益事業として出版事業を企画する」課題も「現代語訳・米欧回覧実記」出版によって、歩を進めることになりました。確実に新しい動きが加速する一方で、それらを支える「総務、会計を中心とする事務局の整備充実を図る」という一番目の課題が追いつきません。七頁の総務部のお願いは切実です。(N)